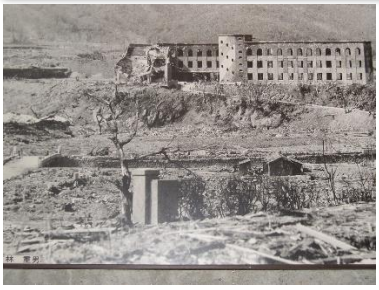
城山小学校　第８６７回　平和祈念式　令和５年１１月９日



【カラスザンショウ、双子ぐすの話】

まずは、「カラスザンショウ」についてです。「カラスザンショウ」は、令和３年の７月までは、体育館の横から見ることができました。「カラスザンショウ」という木はミカン科の樹木です。この木の葉をえさにするアゲハチョウもおり、たくさんの生き物たちが集まる生命力あふれる木だったことと思います。また、周りの木々にも、たくさんの鳥がとまり、美しい声でさえずり、すてきな樹木園だったことでしょう。

1945 年 8 月 9 日、原子爆弾の炸裂により、城山小の樹木のほとんどが焼け落ちてしまいました。城山小学校は、爆心地から５００ｍしか離れていません。当時、九州一と言われた頑丈でモダンな鉄筋コンクリートの校舎も、一瞬のうちに破壊されてしまいました。建物が破壊され、周りのほとんどの樹木が倒れ、焼けた中、このカラスザンショウは生き残りました。しかし、そのままの姿ではありませんでした。原子爆弾の威力はすさまじく、生き残ってはいても、幹全体の皮ははがれおち、今にも倒れそうな状態でした。そこで、人々はそんなカラスザンショウに支柱をしました。そして、そんなカラスザンショウをもう一つ支えたのが、となりのムクの木でした。ムクの木が今にも倒れそうなカラスザンショウを支え、ともに生きてきました。その生命力は、見る人に勇気を与え続けてきたのです。しかし、２０１６年の大雪でカラスザンショウは枯れてしまいました。そのとき、多くの人が悲しみ、その姿を残してほしいと訴えました。その声を受け、カラスザンショウは保存処理をされ、その場所でその姿を見ることができるようになったのです。

このように、大切にされてきたカラスザンショウですが、年々痛みがひどくなり、保存がむずかしくなったため、いよいよ平和祈念館に移すことになりました。令和３年の 7 月、カラスザンショウがくずれないようにお薬をぬる作業をし、それから福岡へ運び、そこでさらにカラスザンショウが長くその姿のままでいられるようにと殺菌処理をしたそうです。そして、また私たちのところへ戻ってきました。今は、祈念館の２階に展示してあります。

双子ぐすは、平和坂の入口からその姿を見ることができます。「双子ぐす」は、原爆が落とされる前は、１本のクスの木でした。しかし、原子爆弾によって燃えた後に新しい芽が芽吹いて、二股に成長します。その形から「双子グス」と呼ばれています。もう死んでしまったと思われたクスの木から 2 つの新芽が芽吹き、大きく成長していく様子は、被爆した人々の心を励ましたと言われています。

原子爆弾が落とされてから７８年たった今でも、双子グスは必死に生き続け、カラスザンショウは枯れてしまってもなお、その姿を残しています。この二つの木が、私たちに教えてくれていることがあります。その一つが、「支え合って生きていくことの大切さ」です。カラスザンショウは、ムクの木やたくさんの人達に支えられ、長い間生き続けることができたのです。もう一つは、「強くたくましく生きてほしい」ということです。もう、死んでしまったと思われたクスの木から、２つの新芽が芽吹き、大きく成長していく姿から、強く生きていくことの大切さを伝えてきたのだと思います。そんな二本の木をもとに作られた歌があります。「カラスザンショウとふたごぐす」という歌です。この歌は２１年前にここ城山小学校の３年生だった子どもたちによって作られました。

今度双子グスを見るときは、上までしっかり見てみてください。二股に分かれているところからさらに上に大きく伸びた、とても大きな木になっています。カラスザンショウも、姿は枯れてしまいましたが、その平和を伝えるその魂はこれからもずっと生き続けます。

この二つの木は、私たちをこれからも毎日見守っています。この木が伝える“支え合うこと”“強く生きていくこと”を胸に、これからも城山小学校の子どもとして平和を願う気持ちを、誰よりも強く持ち続けていってほしいと思います。